青木猛比古先生を偲ぶ

故
元佐伯町助役　高司正直

（左の一文は昭和七年七月十六日青木猛比古先生建碑除幕式当日南海部郡町村長代理として高司氏の読まれた祝辞であります。）

本日慈に我が郷土南郡唯一の勤王の志士として、其の偉大なる勲功と其の熱烈なる尽忠報国の精神との長く世に埋れてゐた、私等の最も敬仰措く能はざる青木猛比古先生の記念碑除幕式を執り行はれるに当りまして、往年先生の深甚なる御愛撫を受けた疋田穀の四男坊である私が、此の席末に列するの光栄を得まして、今先生の碑前に額き、一片の祝辞を述べさせて戴きますことは、私の一生を通じての忘難い幸であり感謝であるのであります。

そこで私は唯単に形式的な言辞を敢て避けまして、真に私の胸にせまる感激其の儘を述べたいと存じます。先生の英霊も主催の方々もどうか私の衷情を御諒察下さって、其の非礼の御寛恕を御願ひ申上げます。

私の幼時、私の父は夏の頃になると、あの長良山の麓の茅屋の椽側を占居して晩酌の盃を傾けるのが常でありました。此の時父の油ぎった丸肩の後ろから渋団扇で風をやることが又私の日課の一つになってゐました。だんだん酒がまはって父が得意然たる気分になりますと、此の竜王山から柏江の方を眺めては如何にも感慨深さうに、青木猛比古先生の壮年時代に於ける御奮闘の状態を語り出す事が度々でありました。そして其の話す父の態度も何時しか真剣になって、盃を持ちながらも手様手真似をするやうになると必ず先生の作『いかりゐの猛き心を心にてかへり見せぬぞ日本ますらを』の和歌を再三口吟むのでありました。私は幼いながらも此時ほど一種いひ知れぬ力強さと誇らしさとに充ち満ちに事はありませんでした。今になって其の時の事をしみじみ追憶して見まして得がたい或る物を培はれた事を感ぜざるを得ないのであります。

青木先生は何方かといへば小柄の色の白い優雅な方であると共に、而も眉の長い眼烱々たるきりゝと引きしまった、全身之れ膽といふ様な方であったやうであります。先生が少壮時代に郷里を出られて因苦奮闘神祇伯白川家の家臣たる間に鍛へ上げられた体力精神力膽力は、尽し常人の知るべからざるものがあったやうであります。

先生は其後時折旅商人風や土方を裂って、飄然と柏江に帰って来られましたが、当時先生の抱いてゐる大志や其の行動の如何を、郷土人が如何で知ることが出来ませう。又先生が之を誰に談りませう。郷土人は唯単に表面的に先生を観察するのみで、落ちぶれた旅商人として、無頼漢的な土方としてゐた位のものでありました。稀に近親者等の中で薄々先生の御行動の一部を覚ってゐるものがあっても、長い間の幕府や藩の権力に恐れを抱いて、絶討に係り合ひにならないやうにと努めてゐたやうな状態であったのであります。

然し慈に本村にも先生を最もよく了解し、先生も亦此の人だけには最もよく許して、即ち肝膽相照した人がありました。それは柏江村の酒屋で義挾気慨の人、野々下儀平太氏であったのであります。先生は何時密かに帰って来られても、多くは此の人の家に寄寓せられ儀平太氏も之を自家酒倉の階上にかくまひ、客分扱として懇切にもてなし、能く先生を庇護せられたのであります。或時は無聊のあまり、村の若者に剣道の稽古をした事もあり江国寺や私の生家などに遊に来られるやうな事もあったが、常に身辺の注意を怠らなかったやうでありました。或る時父に向って「今度は是非同伴して京都の神祇伯白川家に仕へさせ大いに仕事をさせる、あなたは大切な家に生れてゐるのだから、何としても往かねばいけない」。などといって切に上京をすゝめられたさうで、下川角之助と先生との御親交等も亦此頃の事であったやうであります。

時に夜蔭密かに同士数人来訪、酒倉に会合し数夜密談の後飄然と何処ともなく出発せられるといふ状態で当時に於ける先生の志士としての御活動が如何に潜行的であったか、苦闘の涙であったか察せられる様であります。而も先生の雄志苦闘は当時に於ける一般幾多志士の例にもれず、持に其の業の成就せんとする瀬戸際までいって遂に倒れました。

若し先生にして慶応三年齢三十有七歳の若盛りで、三条橋上佐幕派の兇刃に斃れしめなかったならば、やがて明治維新の成

就を見て如何に歓呼の祝盃をあげたであろうか。そして明治新政に参与して其の力量を遺憾なく振はれ、其の声望は広く全日本に輝き、郷土人も亦先生のかくれたる偉勲を窺ひ知ることが出来、如何ばかり、感謝敬慕を捧げたであらうものを。まことに千秋の恨事であります。

先生は郷土に於て単に或る一部の人々に知られてゐるのみで寧ろ其の偉業は他郷にて認められて居るやうな感があるのであります。先年私は宇佐中学校に於ける県下中等学校歴史研究会に参会しました。其際全校教諭小野精市君が彼の御許山事件についての研究発表をせられ、其の主謀者である青木先生の器量人格義気画策等について述べられました。私は我が郷土の而も世に埋れたる先生が此の舞台に現はれた事に感奮しまして、私の発表の要項を俄かに変更して私の胸裡に浮ぶまゝの先生を、稍々興奮して附加講演しました処が、其の懇親会の席上では「快男児志士青木猛比古君」といって誰彼からも多くの盃を受け、いひ知れぬ快感を感じた事がありました。

先生は真に本郡唯一人の勤王志士でありながら、而もそれが先生の悲壮なる殉国的な最後と共に、全く世に埋れてゐました事は単に先生の偉勲が世に現はれないばかりでなく、現代に於ける我が郷土思想教育上にも遺憾此上もない事と痛嘆し、慈に本郡教育会が率先して記念碑建設の挙に出られました事は、洵に嘆賞措く能はざる処で、而も亦それが先生とゆかり浅からぬ下川校長の主唱に端を発せられたるを聞き、一層ゆかしみの深さを感ぜしめられるのであります。先生が幼時朝夕参拝怠りなかった、そして国事莽走の間夢寝だも忘れ得なかった此の鎮守の麓、幼かりし友の誰彼と水遊びに鮑釣に餘念なかった堅田川の清流に臨んで、先生の御気にふさはしいすっきりとした此の碑を慈に仰ぎ奉る時我等はそゞろ感涙にむせぶものであります、先生の英霊は更に厳然として永へに我等後輩を指導し、愈々我等を感奮勇躍せしめられるものと信じます。

本日慈に記念碑除幕式の意義深き盛典に列し、無量の感慨を以て新に尽忠殉国明治維新の志士青木猛比古先生の偉業を偲び奉り、本郡教育会員諸賢の此の美挙に討して深甚の敬意を表するものであります。（終）